

# アートパス取手2003

芸大取手校地で毎年行われている「創作展」は今年で12回目を迎える。  
 “表現する場所”を考える契機として、2003年の「創作展」  
 アートパス取手 に学生たちはどのように取り組んだのだろうか。



アートパス取手2003 の準備風景

## 学生は「学生のいる風景」を どう構築するか

笹原晃平

「創作展」は芸大取手校地で毎年開かれる展覧会であるが、今年で十二回目を迎えることとなった。これは、もともと取手に一年間しかない絵画科（油画）が学生運営で行った展覧会であり、この十年の間に参加する人間や学科が増え、規模が徐々に大きくなっていったと聞いている。完全に学生が動かしていくイベントではあるが、油画、デザイン科、先端芸術表現科、音楽環境創造科は授業の一環として取り組むことになっている。今年も例年どおり十二月上旬に取手校地を中心として開催されることが決まっている（今年度から名称を「アートパス取手」と変更）。

「表現する場所」に関しても学生の居場所と同じことが言えるのではないだろうか。私たちは普段、二カ所の展示・発表の場を持つことができる。一つ目は、授業に取り組んだ末の結果である学内展示会。二つ目は、外で自主的に行う活動。つまりギャラリーを借りたり、イベントに参加したり、コンペに応募する方法だ。両者は同じようではあるが、決定的に異なる部分の一つある。それは使用する場所の確保についてである。

私の所属する先端芸術表現科では、たびたび「場所」についての議論が行われる。アトリウムを持たないことが、かわる人間の居場所を考える動機となり、ホームである上野校に部屋が一つしかない事実が、科の居場所を作る上という動機となる。大学に居場所を持たなくなると、わざわざ大学まで足を運ぶ人間は少なくなるのが現状だ。きつとmanやsoで情報のやりとりをすることが可能だからだ。このようなインターネット上の場所は、人間側の現在地を選ばないゆえに非常に便利であると思つし、大学内外の出入りの頻繁な我々には都合のよい他者へのアプローチの仕方がかもしれない。ただ、その合理さだけを追求し、現実の居場所を求めなくなれば、

大学での授業では、先にも述べたとおり、その課題のまとめとして展覧会を開くことがよくある。そのための準備は結果的に大学側とやりとりすることになり、助手や事務申し出るによって、書類による手続きのみで場所を確保することができる場合がほとんどだ。しかし外で活動する場合は常に場所を勝ち取らなくてはならない。自分で足を運び、人間や社会に対して口と資料で説明し、許可やときには理解を得なくてはならない。自力で場所を勝ち取るというのは大変なことだ。

「創作展」というものは、大学内の課題とも外で行う課外活動とも、どちらにもあてはめ



アートバス取手2003 準備風景



上は 2002創作展 のポスター。  
アートバス取手2003 は東京芸大取手校地にて12月上旬に開催される

することはできないだろう。現在も過去もすべてにおいて学生運営のものであることと、授業であり単位を得ることができることという異なる二つの側面を持っているからだ。私はこの事実が、「表現する場所」を考えるきっかけになっていったらよいと思っている。そしてそれが学生レベルではなく、大学全体を網羅する意識として進んでいってほしい。つまり、学生自身が作品の出品や運営にかかわることで展示・発表する場所についてそれぞれが考えたことが、その後も大学側に発言してゆく材料になればよいのではないだろうか。

と考えているのだ。

東京芸術大学に入学して半年以上がすぎたが、この大学での学生の動きは極度に少ないように思える。大学の外で自主的に活動する者が数多くいるからだとは思うが、もう一度ホームに戻って、学生らしくがむしゃらになつてみるべきだと素直に感じる。そうすることが結局は、「学生のいる風景」を構築することにつながるのではないだろうか。  
(さきはら・こうへい／美術学部先端芸術表現科一年)